

# 父娘の絆「広美丸」

～ 亡き父の船を引き継ぎ漁業へ参入 ～

谷山漁業協同組合 右田広美

## 1 地域の概要

鹿児島市は、鹿児島県の県庁所在地で、2004年に近隣の5町と合併し人口が60万人を超える南九州最大の都市である。市内は商工業化や宅地化が進んでいるが、桜島を望む景観は、「東洋のナポリ」とも称され年間約900万人が訪れる観光都市でもある。

鹿児島市の中心部に位置する谷山地区は、埋め立てが進み、大型の新興住宅地が造成され大規模な商業施設が進出している。



図1 位置図

## 2 漁業の概要

私の所属する谷山漁業協同組合は、正組合員50人、準組合員40人で、高齢化が進み組合員数は減少傾向にある。主な漁業種類は、刺網、定置網、潜水漁業、一本釣り等で、漁獲物は直接組合員が鹿児島中央卸売市場に出荷している。平成19年の漁獲量は、120トンであった。

## 3 研究・実践活動の取組課題選定の動機

谷山で生まれた私は、幼い頃から船と海が大好きで、両親と漁に行く6歳上の兄をうらやましく思っていた。

しかし、鹿児島湾の中にバショウカジキが来遊する夏休みになると、父は私を対岸にある垂水や古江沖に一週間ほどの泊まりがけの漁に連れて行ってくれた。カジキ流網は夜間操業するので一晩中休む間がなかったが、大漁の時に鹿児島の市場に水揚げするのが楽しみだった。時には、台風の中を帰ってくることもあり危険な体験も数多くあったが、今思えば無謀な父だったと思う。



図2 初代広美丸

私は、高校に進学する頃には海から遠ざかっていたが、就職してOLになると、時間を見ては獲った魚を市場に持って行った。その後、22歳の時、一度は都会に出たい夢もあり横浜に出たが、母の突然の死により半年あまりで帰郷しなければならなくなった。当時、自衛官だった兄と弟は、父の近くに居ることが出来ず、ショックを受けている父を独りにしないため故郷に戻ってきたのである。

故郷で職を求め、やがて25歳で結婚し長男が生まれた。長男が2歳くらいになると父はバイクで迎えに来ては、漁に連れて行くようになった。昼間だけなら心配もなかったが、夜の漁まで連れて行くようになり、私も徐々に一緒に漁に出るようになった。

#### 4 研究・実践活動の状況及び成果

父と一緒に仕事をした漁船「広美丸」は、昭和50年9月建造の2.7トンで、当時の谷山漁協では初のプラスチック船と聞いている。



図3 広美丸2.7トン

しかし、私が父と漁に行き始めた頃には既に建造後17年目であったが、それから20年近くずっと同じ船を二人で大切に使ってきた。ちなみに、この船は現在私の名義になり、今でも現役で漁に出ている。

歌の文句ではないが「型は古いが時化には強い」が父の口癖であった。

また、信じられないかもしれないが、私達の船には魚探もGPSも付いていない。漁場はもちろん父の経験と山立てで決めていた。天候についても、天気予報は一応見るが、一番は桜島の煙と雲を見て、明日の天気や風を読んでいた。

船の修理もほとんど家族で行ってきた。幸いにも、夫が車の板金塗装業をしていたのでいろいろ教えて貰い、船体修理はグラスファイバーを貼ったり、ペンキ塗りも独りで出来るようになった。

仕事内容や漁法などを父が手取り足取り教えてくれたと言いたところだが、「見て憶える」と言わんばかりの態度で、最初は何も教えてはくれなかった。父は「女は漁師にはなれない」と考えていたのだろう。おかげで、私の中には反発心が生まれ、意地と根性で頑張ることが出来た。

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
漁法												
カマス網					■	■	■	■	■	■	■	■
モチウオ網 (イボダイ)								■	■	■	■	■
ヒラメ網	■	■	■									■
雑魚網 (ワタリガニ, 甲イカ)						■	■					
タコツボ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

図4 年間操業スケジュール

私達親子でやってきた漁は数多く有るが、主には刺網とタコツボ漁である。

刺網は、春先からのカマス網、夏からモチウオ（イボダイ）網、冬にはヒラメ網と続き、梅雨の頃にはワタリガニやコウイカの刺網も操業した。

タコツボは、産卵期の11月1日から11月30日を除き1年中操業した。タコツボ漁も改良を重ねて陶器の壺からコンクリート、プラスチックに変わり、餌もカラスガイ、カニ、アサリと変遷しタコとの知恵比べを繰り返してきた。

カマス・モチウオ刺網は、朝夕2回の操業である。私達の船はスピードが出ないので人より早く出港して漁場を確保しなければならないため、朝の操業は真夜中の午前3時頃出港する。漁場に着くと網を張り、日の出前に揚げ始めて2時間ほど揚網作業を行う。午前9時頃に一旦帰港して水揚げし、朝食の後、タコ壺を揚げるために再度出港する。なお、タコ壺は揚げてタコを取り出した後、すぐに投入して3～4日おく。帰港してタコを水揚げした後は、身体を休めて夕方のカマス漁に備える。

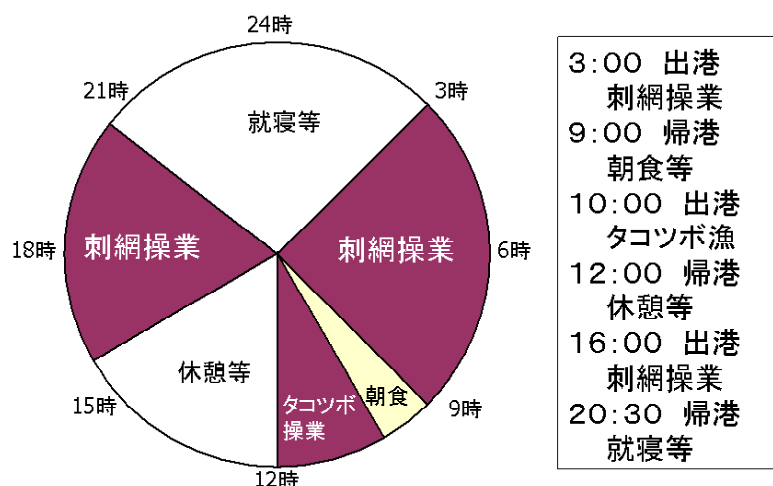


図5 カマス・モチウオ網操業スケジュール

夕方は、午後4時頃出港して暗くなってから操業し午後8時半頃戻ってくる。当日漁獲したカマス、モチウオ、タコ等はクーラーボックスに入れておき、翌朝、人に頼んで市場に出荷してもらうという毎日の繰り返しである。

私が漁に行き始めた頃は、谷山地区ではモチウオ（イボダイ）は漁獲されていなかった魚で、魚自体も知られていなかった。あるとき、叔父の小型定置網にたくさん入網し、値段も高値だと知った父は、他の漁協の知人に聞いていち早く網を作った。

カマスとモチウオは年によっては漁期が重なるので、カマスとモチウオの操業を交互に行ったり、漁模様を見てどちらかに絞って操業する。

ヒラメ網は漁協の取り決めで操業期間が12月1日から3月31日の4ヶ月間と決められており、ヒラメを中心に鯛やコチ、エイ、アンコウを漁獲する。漁具は500mほどの網を2組準備し、1日おきに揚げることにしているが、冬は時化が続くと4～5日は出漁できないこともある。漁獲したヒラメは翌朝活かして出荷するために、私が海水を入れたクーラーで市場に車で運んでいた。

その他にも、私は漁の合間を見ては、大潮の時に潮が引いた海岸に出かけワカメ、アサリ、カラスガイ、マガキガイを採って魚と一緒に出荷したり、値段の安い時はアオアジやカマスの開きを作って収入の足しにしたり、経費削減のために氷や魚箱の調達も自分で行ってきた。

船に乗ると常に緊張の連続であるが、時として心温まる事もある。鹿児島湾には沢山のイルカが生息していて、資源を食い荒らしたり、近づいてくると魚が逃げ散って漁にならないので、湾内の漁業者からは嫌われている。

ある日、ヒラメ網を揚げていると、遠くに暴れる魚が見えたので、時期外れのカジキかと思っていたら、近くにイルカの群れが居て、その揚げている網にイルカがかかっていた。私の頭の中は真っ白になり、途方に暮れる間もなく、後方の父から「早く網を揚げろ」と促された。

イルカに近付くと、つがいか親子なのか、もう一頭が心配そうに寄り添っている。それを見た父は、迷うことなく「網はどうなっても良いから逃がしてやれ」と言った。

そう言われても、私の中ではその年に父が苦労して新調した網にナイフを入れることは心が張り裂けそうであった。暴れるイルカに「静かにして」と言いながら涙したことは忘れられない。イルカは自由を取り戻すと、仲間の群れとともに、まるで御礼を言っているかのように高くジャンプして遠ざかっていった。

あの時、父はどんな気持ちで指示したのだろうか。でも、私にとっては父の優しさを改めて感じる出来事であった。

この20年の間には漁業以外のことも父から引き継いだ。父は港の世話役も引き受けていたので、年3回のエビス祭りの炊き出しや宴会に私も参加させ、年2回の海岸清掃、松魚礁の投入、タコツボのタコ産卵床投入にも積極的に参加して地元の漁師仲間と面識を深める機会を与えてくれた。



図6 谷山地区松魚礁設置

## 5 波及効果

父は女が漁師になることなど考えていなかったが、私は「広美丸」と海が大好きであった。

漁に行き始めた頃は、手伝い程度のつもりであった。そんな折、父がバイクで事故に遭い海に出られなくなってしまった。私は免許がないと船の管理すら出来ないことを知り、小型船舶操縦士の免許を取得した。それを機に、遊漁船業の業務主任者の資格や工事作業の警戒船の資格も取得した。

父は、漁業を兄に譲る気持ちをずっと持っていたのだが、その兄は11年前に他界してしまった。その後、頑固な父も少しずつ私に対して接し方が変わってきた。

朝真っ暗な内から海に出て夜遅くまで海で頑張る毎日。漁に行っても、泣き言一つ言わず、子供と過ごす時間を削り家庭を犠牲にしてまで父についてきた私の姿を見て、いつしか認めてくれるようになっていた。

父が船長、私が漁労長という役割で、数年前からは漁場選びを始め出漁も全て任せてくれるまでになった。



父が80歳を過ぎた頃からは、周りからも船や組合員資格の名義を変更する話があったが、父の生き甲斐が無くなりそうなので私は先延ばしにしてきた。父が82歳で病気になったことを機に、早く正組合員になるよう強い勧めもあり、私は平成22年2月に谷山漁協の正組合員となった。

父はその後一ヶ月あまりは最後のヒラメ網に行き、それからは入退院を繰り返しながら平成22年10月、建造後37年の船と多くの教えを残して帰らぬ人となった。



図7 在りし日の父

## 6 今後の課題や計画と問題点

いま、私は父から譲り受けた船を持ち正組合員として漁業を営むようになったが、父とともに漁に出ていた頃に比べ海の中が変わってきたと感じている。これまで見たことのないリュウグウノツカイが獲れたり、海水温が上がり出荷できない魚が増えたため水揚げの量も金額も減少している。

私はこれから、いままでの漁法はもちろん、他の漁業者や普及指導員の協力を得ながら漁場や漁法を研究していきたいと思う。

最近、漁師仲間が個人で鮮魚の直売を始めたところ、客がつき手応えもあるようである。漁業者や組合、市、県の協力があれば直売所は地域の活性化と漁業所得の向上に繋がると思う。みんなと協力して、よりよい魚を消費者に納得できる価格で提供する取り組みや、値段の安い時にアオアジやカマス等の加工品を作って直売することにも挑戦したいと思う。

また、とても大切な海の環境を守る活動も重要である。その一つが海の浄化や稚魚の保育場としても役立つ藻場の造成である。藻類は海の環境を守るだけでなく、クリーンエネルギーとしても注目され、健康食品などでも脚光を浴びている。

子供達のためにも、今ある谷山の海の環境を守り、資源を育むためにワカメやヒジキの海藻養殖にも漁協組合員の方々と共に取り組んでいきたいと思う。

最後に、かつて父が沖縄復帰に際して漁業技術を指導する支援活動に従事し、沖縄の漁業復興に尽力したことがあったように、機会を見つけて私も父を見習って東北の震災被災漁業者の復興のお役に立ちたいと願っている。